

幼児における「場所の占有」に関する理解の発達

林 冬実¹⁾・中道圭人²⁾*

¹⁾東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程

²⁾千葉大学・教育学部

Development of Understanding about Occupancy of Place in Young Children

HAYASHI Fuyumi¹⁾ and NAKAMICHI Keito²⁾*

¹⁾Doctor Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

集団生活では、子どもたちは「グループが所有する物体や空間」をグループのメンバーと共用する。本研究では、グループが所有する複数人用の机を用いて、幼児の「場所の占有」に関する理解を検討した。年少児23名 ($M=50.00$ か月)・年長児29名 ($M=73.93$ か月)を対象に、所有物が置かれた4人掛け机を提示し、使用可否判断課題(ある場所の使用可否を尋ねる)と占有権判断課題(ある場所を使用できる人物を尋ねる)を行った。その結果、3—4歳児でさえも「所有物がある場所を使用してはいけない」という認識を持ち、5—6歳児は「4人掛け机での1人当たりの占有範囲(面積)は4分の1程度」といった、成人と類似した認識を持つことが示された。さらに、ある場所を使用できる人物の判断には、幼児は「先行占有のルール」を適用しないことが示された。本研究は、幼児の集団生活や社会性の発達を支えるための重要な示唆を提供している。

Young children share “group-owned objects and spaces” with group members in social groups. This study examined young children’s understanding about “occupancy of place” at group-owned tables. Twenty-three younger children aged 3- to 4-year-olds ($M = 50.00$ months) and twenty-nine older children aged 5- to 6-year-olds ($M = 73.93$ months) participated in this study. Participants performed two tasks: the availability task judging whether the person can use the places, and the occupancy task judging which person can use the place at a table with a possession on it. The results showed that even 3- to 4-year-olds had a recognition that we must not use the place where the possession was placed, and 5- to 6-year-olds had an adult-like recognition that each person could occupy about a quarter of the table at a four-person table. Furthermore, 3- to 6-year-olds did not apply “Prior possession rule” when judging which person could use the place at a table. This study has important implications for supporting social life of young children and the development of social skills.

キーワード：幼児 (young children), 占有 (occupancy), 所有権 (ownership), テリトリー (territory), 認知発達 (cognitive development)

問題・目的

子どもたちは、2歳頃から「自分のもの」と「他者のもの」を区別し (Brownell et al., 2013; Fasig, 2000; Ross et al., 2015), ある対象が「自分のもの」であることを他者に主張するようになる (Levine, 1983; Rossano et al., 2011)。このような「所有」に関する理解は、社会生活の中で、自分の権利を主張すると共に他者の権利を尊重して、互いが快適に過ごすために重要となる。

ある物体を所有することは、その物体を全面的に支配する権利(所有権)を持つことを意味する。この所有権の理解に関してRoss et al. (2015)は、自分や他者が持つ所有の権利を幼児期から理解していることを示している。具体的に、Ross et al. (2015, Ex.2)は、幼児16ペア ($M=23.9$ か月)を対象に、2人の中央に両者の所有物(人形

や玩具)を置いて、自由遊びの様子を8分間観察した。その結果、幼児はペア児の所有物 ($M=176.7$ 秒)よりも自分の所有物 ($M=910.2$ 秒)に長く接触し、自分の所有物 ($M=0.44$ 回)よりもペア児の所有物 ($M=1.50$ 回)を、所有者であるペア児に多く差し出した。

また、所有物の中には、個人が所有するものだけでなく、国・学校・クラブのような「グループ」が所有するものもある。幼児は、グループの所有物の場合、メンバー個人の権利には制限があること (Huh & Friedman, 2017) や、頻繁に使用していても実際には個人の所有物ではないこと (Cleroux & Friedman, 2021) を理解している。例えば、4—7歳児は「ある子が毎日同じ公園のブランコ/図書館の椅子を使う」物語を聞いたとき、「その子がブランコ/椅子を所有しているように感じている」ことを肯定したが(肯定率=71.4%)、「ブランコ/椅子がその子の所有物である」(2.0%)ことを肯定しなかった (Cleroux & Friedman, 2021, Ex.1)。

*連絡先著者：中道圭人 nakamichi@chiba-u.jp

さらに、こうしたグループの所有物に関して、その物体を占有する（所有権の有無に関わらず、事実上支配する）権利が誰にあるかを決定するために、「先に保持・使用した人にその物体を保持・使用する権利がある」という先行占有のルール（Prior possession rule: Bakeman & Brownlee, 1982）を幼児は用いている（倉持, 1992; 山本, 1991）。例えば倉持（1992）は、いざこざで使用される方略と子ども同士の関係に着目して、5—6歳児の物をめぐりいざこざを観察した。その結果、遊び集団内の20事例のうち11事例（55.0%）で、幼児が「先取り」（先にその物に関わっていたことを主張して、物を獲得しようとする）の方略を用い、そのうち9事例で方略が有効に働いていた。

このように、幼児期から「個人の所有物」や「グループの所有物」での個人の権利を区別していることや、誰に占有権があるかについて「先行占有のルール」を用いることが明らかになっている。しかし、これらの研究は、同時に複数人が使用できない（1人で使用する）物体を扱って、幼児の理解を検討していた。集団生活の中では、共有機のような複数人用の物体や、砂場のような空間を、複数人で同時に使用することもある。そして、このような物体や空間は、明確な境界がなく「誰がどこまで占有しているのか」や「個人がどれくらい占有できるのか」が曖昧である。そのため、意図せずに他者の占有権を侵害してしまうことも少なくない。

この境界の曖昧さに関して、Becker（1973）は「ある場所に置かれた物体が、『その場所を占有していること』を表す機能を持つこと」を示している。具体的に、Becker（1973, Ex.2）は、大学生に「4人掛け机の一角に本が積み重なって置かれた画像」を提示し、「その本が意味すること」や「机のどこに座るか」について尋ねた。その結果、参加者の多くが「机上の本は、所有者の不在を表し、その場所を守るために置かれている」等と回答し、「本のある場所に座る」と回答した参加者はいなかった。このことは、成人が「机上に置かれた本」という情報から、その場所を占有する人物がいると判断したことを示している。また、4人掛け机の「参加者自身のものだと思う範囲（面積）」を略図に描かせたところ、ほとんどの成人が「机の4分の1か、1つの椅子の前の場所」を占有できると考えていた（Becker, 1973, Ex.2）。

さらに、ある場所を誰が支配できるかについて、土地の所有に関しては、子どもが「先にいた人」に所有権があると判断することが示されている（Verkuyten et al., 2015）。具体的に、Verkuyten et al.（2015, Ex.1）は、9—12歳児に「ある島に最初にグループAがいて、次にグループBがいた」場面を提示し、「島を所有しているのは誰か」を尋ねた。その結果、参加児の28.5%が、最初に島にいたグループAと判断し、グループBと判断した参加児は1.9%のみだった。

このように、成人が「机に置かれた物体は、場所の占有を表す」、「4人掛け机の4分の1あるいは1つの椅子の前の場所を占有できる」と考えること（Becker, 1973）や、子どもが誰に所有権があるかを決定するために「先にいた人」を優先すること（Verkuyten et al., 2015）が示されている。しかし、Becker（1973）は大学生対象に

実験を行っており、場所の占有に関する幼児の理解については明らかではない。また、Verkuyten et al.（2015）は、島という土地の「所有権」について扱っており、集団生活における場所の占有権に関しても子どもが同様に判断するのかが不明確である。物体だけでなく、場所の占有が幼児同士のいざこざの原因になる（臼井ら, 1994）ことを踏まえると、幼児が場所の占有をどのように理解しているかを明らかにすることは、彼らの社会的な学びを支えるためにも重要となる。

以上を踏まえ、本研究では「幼児における場所の占有に関する理解の発達」を明らかにするために、年少児と年長児を対象として、以下の3点を検討することとした：(1)幼児は、「机に置かれた所有物は、所有者がその場所を占有していることを表す」と考えるか；(2)幼児は、4人掛け机において、1人が占有できる場所をどのくらいだと考えるか；(3)幼児は、「先に使用していた人」にその場所の占有権があると考ええるのか。これらを検討することは、幼児の快適な集団生活や、社会性の発達を支えるために、どのような環境設定が重要かについて新たな知見を提供すると考えられる。

この検討のために、本研究では「幼稚園（保育所）で皆で使う机」に関する仮想場面を用いた2つの課題（使用可否判断課題、占有権判断課題）を実施した。具体的に、使用可否判断課題では、Becker（1973）を参考にして「主人公が机の一角に所有物を置く場面」を提示した。そして、別の人物が所有物・椅子を移動すること、椅子のある場所・所有物付近を使用することの可否や、他者がそれらの場所を使用した際の主人公のネガティブ感情の度合いを尋ねた。また、占有権判断課題では、Verkuyten et al.（2015）を参考に「人形Cが座っていた場所に、人形Dが所有物を置く場面」を提示した。そして、「（先に使用した）人形C」と、「（後に来て所有物を置いた）人形D」のどちらがその場所を使えるかを尋ねた。

方 法

参加児

関東圏の幼稚園や保育所に通う年少児23名（男8名、女15名： $M=50.00$ か月、 $SD=3.63$ ）、年長児29名（男13名、女16名： $M=73.93$ か月、 $SD=3.35$ ）が本実験に参加した。

倫理的配慮

研究実施にあたり、施設長および幼児の保護者に書面での同意を得た。また、調査時に幼児自身に参加の意思を尋ね、同意が得られた場合のみ調査を実施した。

手続き

個別面接で実験を実施した。すべての参加児に対して、まず「登場人物の紹介・所有物の確認」を行った。その後、物語形式で「使用可否判断課題」と「占有権判断課題」を行った（課題順は一定）。それぞれのステップの具体的な内容を以下に記述する。

登場人物の紹介・所有物の確認 赤・青・黄・緑の服をそれぞれ着用した4体の人形（高さ約17cm）を参加児の前に並べ、参加児に各人形を紹介した。このとき、

使用する人形の性は参加児と同性とした。そして、参加児に「どの人形が最も好きか」を尋ね、参加児が選択した人形をその後の物語の主人公（人形A）とした。

その後、参加児の前に提示した模型の机（短辺10cm、長辺20cm）に4つのコップをランダムに並べ、服と同じ色のコップが各人形の所有物である（例：青いコップは青くんのものである）ことを確認した。さらに、机が「人形たちの幼稚園（保育所）の机であり、全員が使えるものである」ことを参加児に伝えた。その後、すべての人形を参加児から見えないように衝立の後ろに隠し、模型の机・椅子のみの状態にした。

使用可否判断課題 (Figure 1・左側) 人形Aを登場させ、人形Aが椅子4脚のうちの1つに座って机の上に自分のコップを置いた後、そのコップを置いたまま立ち去る場面（主人公による場所の占有場面）を提示した。

次に、お絵かき帳（4cm×5cm）を持った異なる人形Bを登場させ、人形Aのコップの上（Figure 1-a）にお絵かき帳を重ねるように配置して「人形Bはこの場所を使っても良いか」を参加児に尋ねた（コップ上・使用質問）。また、「この場所を使うために人形Aのコップをどかしても良いか」（コップ・移動質問）、「人形Aが座っていた椅子を持っていっても良いか」（椅子・移動質問）を尋ねた。

続いて、人形Bをコップの対角（Figure 1-b）に配置し、「人形Bはこの場所を使っても良いか」を参加児に尋ねた（対角・使用質問）。また、人形C・Dを用いて、コップの隣（Figure 1-c）・正面（Figure 1-d）に関する使用質問を尋ねた（隣および正面・使用質問）。その後、「人形Aが戻ってきた」ことを伝えながら、人形Aを机の傍に置き、人形B・C・Dが椅子のある場所を使っていたときの人形Aの感情について尋ねた（椅子のある場所・感情質問）。具体的に、人形Aが「嫌」か「嫌でない」かを尋ね、参加児が「嫌」と回答した場合には、さらに

3段階（「少し嫌」「嫌」「すごく嫌」）でその度合いを尋ねた。

最後に、机の長辺中央（Figure 1-e）・短辺中央（Figure 1-f）・短辺中央よりもコップに接近した場所（Figure 1-g）に関して、同様の手順で使用質問と感情質問を尋ねた。接近した場所については、コップに接触していないことを参加児と確認したうえで質問を尋ねた。すべての質問が終了した後、人形・コップを衝立の後ろに隠し、模型の机・椅子のみの状態にした。

占有権判断課題 (Figure 1・右側) 人形Cを椅子4脚のうちの1つに座らせた。そして、座っていた人形Cがその場所を立ち去った後、人形Dが同じ場所にコップを置いて立ち去る場面（使用者の移行場面）を提示した。

その後、人形CとDを同時に登場させ、「この場所を使えるのはどちらか」（占有権質問）と、その理由を参加児に尋ねた。参加児が回答した後、参加児が選ばなかった人物の情報を伝え、再度回答を確認した。具体的に、参加児が「人形C」と回答した場合には「人形Dのコップが置いてあること」、「人形D」と回答した場合には「最初に来たのは人形Cだったこと」を確認したうえで、最初の回答で良いかを尋ねた。

得点化・符号化及び分析

使用／移動質問では、「使用／移動の可否」を分析に用いた。感情質問では「嫌ではない」を1点、「少し嫌」を2点、「嫌」を3点、「すごく嫌」を4点とし、その値をネガティブ感情得点（1—4点）として分析に用いた。占有権質問では、「（先に使用した）人形C」を選んだ場合を「先」、「（後に来て所有物を置いた）人形D」を選んだ場合を「後」とし、2回の質問に対する回答を「先—先」「先—後」「後—先」「後—後」の4つのカテゴリに分類した。また、参加児の判断理由を「先にいた」「コップがある」「その他」の3つの理由カテゴリに分類した。

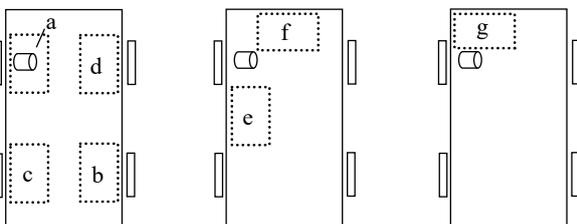
【使用可否判断課題】

人形Aが椅子に座っているが、所有物（コップ）を置いていなくなったことを示す



別の人形が

- コップ上(a)を使用すること、コップおよび椅子を移動することの可否を尋ねる
- 対角(b)・隣(c)・正面(d)・長辺中央(e)・短辺中央(f)・接近(g)を使用することの可否と、それらを他者が使用した際の人形Aのネガティブ感情の度合いを尋ねる



【占有権判断課題】

椅子に座っていた人形Cがその場を立ち去り、その後人形Dがその椅子の前にコップを置いて立ち去ったことを示す



人形Cと人形Dのどちらがその場所を使用できるかと、その理由を尋ねる



Figure 1 各課題の手順の概要

なお、すべての分析にはIBM SPSS version 28.0を使用した。

結 果

場所の使用や物体の移動に対する可否判断（使用可否判断課題）

椅子のある場所を使用することの許可率 学年別の使用・移動質問における許可人数と許可率をTable 1に示す。まず、Table 1・左側の「椅子のある場所の使用」に関して、学年（2：年少児・年長児）や場所（3：対角・隣・正面）によって許可率が異なるかを検討するため、使用の可否を従属変数とした一般化推定方程式（GEE）による分析を行った。独立変数としては、学年(2), 場所(3), そして学年(2)×場所(3)の交互作用項を投入した。その結果、学年 ($Wald\chi^2(1)=0.43, p=.512$) および場所 ($Wald\chi^2(2)=4.60, p=.101$) の主効果、学年×場所の交互作用 ($Wald\chi^2(2)=0.22, p=.898$) はいずれも有意でなかった。

続いて、場所ごとにチャンスレベル検定を行った。その結果、対角 ($t(51)=9.78, p<.001, d=1.38$)・隣 ($t(51)=13.55, p<.001, d=1.88$)・正面 ($t(51)=17.14, p<.001, d=2.38$) のいずれにおいても、幼児の許可率はチャンスレベル (.50) より有意に高かった。

所有物付近を使用することの許可率 Table 1・中央の「所有物付近の使用」に関して、学年（2：年少児・年長児）や場所（4：コップ上・長辺中央・短辺中央・接近）によって許可率が異なるかを検討するため、使用の可否を従属変数とした一般化推定方程式（GEE）による分析を行った。独立変数としては、学年(2), 場所(4), そして学年(2)×場所(4)の交互作用項を投入した。その結果、場所の主効果 ($Wald\chi^2(3)=14.36, p=.002$) が有意で、短辺中央よりコップ上 ($B=-2.53, SE=0.98, Wald\chi^2(1)=6.64, p=.010, OR=0.08, 95\%CI[-4.46, -0.61]$)・接近 ($B=-1.36, SE=0.64, Wald\chi^2(1)=4.58, p=.032, OR=0.26, 95\%CI[-2.61, -0.11]$) で許可率が低かった。また、学年×場所の交互作用 ($Wald\chi^2(3)=6.27, p=.099$) が有意傾向だった。学年の主効果は、モデルは有意だったが ($Wald\chi^2(1)=5.75, p=.016$)、パラメータ推定値では有意でなかった ($p=.219$)。

交互作用 (Figure 2) について検討するため、下位分析を行った。まず、学年別に各場所の許可率を比較するため、CochranのQ検定を行った。その結果、年少児 (Q

(3)=17.12, $p<.001$) では、長辺中央・短辺中央・接近よりコップ上で許可率が低かった ($ps<.01$)。また、年長児 (Q(3)=11.92, $p=.008$) では、短辺中央よりコップ上・接近で、長辺中央よりコップ上で許可率が低かった ($ps<.05$)。続いて、場所別に年少児と年長児での許可率を比較するため、各場所に関して、学年(2)×使用の可否(2)の χ^2 検定を行った。その結果、接近 ($\chi^2(1)=12.84, p<.001, \phi=.50$)・長辺中央 ($\chi^2(1)=4.29, p=.073, \phi=.17$) では、年少児で許可率が高く、年長児で低かった ($ps<.05$)。コップ上 ($\chi^2(1)=0.65, p=.577$)・短辺中央 ($\chi^2(1)=1.53, p=.260$) では有意な違いはなかった。

最後に、学年・場所別にチャンスレベル検定を行った。その結果、年長児の許可率は、コップ上 ($t(28)=-13.50, p<.001, d=-2.51$)・長辺中央 ($t(28)=-3.83, p<.001, d=-0.71$)・短辺中央 ($t(28)=-2.17, p=.039, d=-0.40$)・接近 ($t(28)=-6.89, p<.001, d=-1.28$) のいずれにおいてもチャンスレベルより有意に低かった。一方、年少児の許可率は、コップ上 ($t(22)=-6.88, p<.001, d=-1.43$) ではチャンスレベルより有意に低く、長辺中央 ($p=.840$)・短辺中央 ($p=.840$)・接近 ($p=.544$) ではいずれもチャンスレベルと同程度であった。

椅子のある場所の使用可否判断と所有物付近の使用可否判断を合わせた検討 幼児が「4人掛け机での1人あたりの占有範囲(面積)は4分の1程度」と考えるかを検討するため、「対角・隣・正面のいずれの使用も許可し、長辺中央・短辺中央・接近のいずれの使用も許可しない」という一貫性のある回答をした参加児を算出した。その結果、該当する参加児は、年少児で4名 (17.4%)、年長

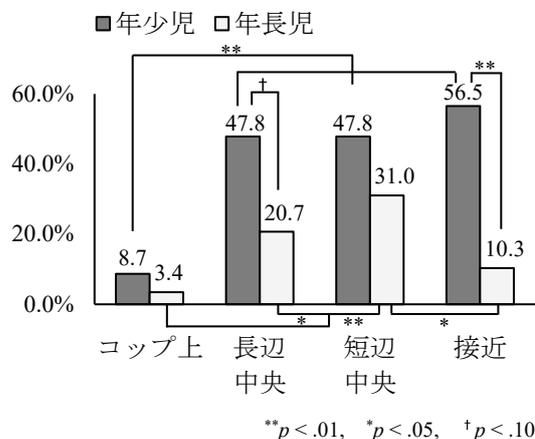


Figure 2 学年・場所別の所有物付近の使用許可率

Table 1 学年別の使用・移動質問における許可人数と許可率

	椅子のある場所の使用			所有物付近の使用			物体の移動		
	対角	隣	正面	コップ上	長辺中央	短辺中央	接近	椅子	コップ
年少児 (n=23)	20 (87.0%)	21 (91.3%)	22 (95.7%)	2 (8.7%)	11 (47.8%)	11 (47.8%)	13 (56.5%)	7 (30.4%)	10 (43.5%)
年長児 (n=29)	27 (93.1%)	28 (96.6%)	28 (96.6%)	1 (3.4%)	6 (20.7%)	9 (31.0%)	3 (10.3%)	3 (10.3%)	14 (48.3%)
全体 (N=52)	47 (90.4%)	49 (94.2%)	50 (96.2%)	3 (5.8%)	17 (32.7%)	20 (38.5%)	16 (30.8%)	10 (19.2%)	24 (46.2%)

児で16名(55.2%)だった。この割合が学年によって異なるかを検討するため、学年(2)×一貫性の有無(2)の χ^2 検定を行った。その結果、学年による有意な違いが見られ($\chi^2(1)=7.74, p=.009, \phi=.39$)、年長児で一貫性のある回答をした参加児が多く、年少児で少なかった($ps<.01$)。

椅子・コップを移動することの許可率 Table 1・右側の「椅子移動」、「コップ移動」に関して、学年(2:年少児・年長児)や物体(2:椅子・コップ)によって許可率が異なるかを検討するため、移動の可否を従属変数とした一般化推定方程式(GEE)による分析を行った。独立変数としては、学年(2)、物体(2)、そして学年(2)×物体(2)の交互作用項を投入した。その結果、物体の主効果($Wald\chi^2(1)=13.61, p<.001$)が有意で、コップより椅子($B=-2.09, SE=0.59, Wald\chi^2(1)=12.47, p<.001, OR=0.12, 95\%CI[-3.25, -0.93]$)で許可率が低かった。また、学年×物体の交互作用($Wald\chi^2(1)=4.50, p=.034$)が有意だった。しかし、学年の主効果($Wald\chi^2(1)=1.03, p=.311$)は有意でなかった。

交互作用(Figure 3)について検討するため、下位分析を行った。まず、学年別に各物体の許可率を比較するため、McNemar検定を行った。その結果、年長児ではコップより椅子で許可率が低く($Z(1)=9.09, p=.001$)、年少児では有意な違いはなかった($Z(1)=0.80, p=.375$)。続いて、物体別に年少児と年長児での許可率を比較するため、各物体に関して、学年(2)×移動の可否(2)の χ^2 検定を行った。その結果、椅子では有意傾向な違いが見られ($\chi^2(1)=3.33, p=.087, \phi=.25$)、年少児で許可率が高く、年長児で低かった($ps<.10$)。コップでは有意な違いはなかった($\chi^2(1)=0.12, p=.785$)。

最後に、学年・物体別にチャンスレベル検定を行った。その結果、年長児の許可率は、椅子($t(28)=-6.89, p<.001, d=-1.28$)ではチャンスレベルより有意に低く、

コップではチャンスレベルと同程度であった($p=.856$)。年少児の許可率は、椅子($t(22)=-1.99, p=.059, d=-0.42$)ではチャンスレベルより有意に低い傾向があり、コップではチャンスレベルと同程度であった($p=.544$)。

場所によるネガティブ感情得点の違い(使用可否判断課題)

感情質問に関して、「椅子のある場所」では参加児全員の回答が得られ、参加児全体の平均得点は1.69点($SD=1.16$)であり、年少児で1.74点($SD=1.25$)、年長児で1.66点($SD=1.11$)であった。しかし、「長辺中央」では年長児1名、「短辺中央」では年少児9名、「接近」では年少児1名の回答を得ることができなかった。そのため、最終的に4つの感情質問すべてに回答した参加児は、年少児14名、年長児28名の計42名であった。そこで、以下のネガティブ感情得点に関する分析は、年少児14名、年長児28名の回答を用いて行った。

学年・場所別のネガティブ感情得点の平均をTable 2に示す。学年(2:年少児・年長児)や場所(4:椅子のある場所・長辺中央・短辺中央・接近)によって得点が異なるかを検討するため、学年(2)×場所(4)の分散分析を行った(参加者間=学年、参加者内=場所)。その結果、場所の主効果($F(3, 120)=4.21, p=.007, \eta^2_p=0.23$)が有意で、Bonferroniの多重比較によると、接近の得点は、椅子のある場所・短辺中央の得点より高かった($ps<.05$)。しかし、学年の主効果($F(1, 40)=0.36, p=.555$)や学年×場所の交互作用($F(3, 120)=0.52, p=.667$)は有意でなかった。

場所の占有権を持つ人物の判断(占有権判断課題)

学年別の占有権判断および判断理由における各カテゴリの人数と割合をTable 3に示す。はじめに、占有権判断に関して、各カテゴリの割合に違いがあるかを検討するため、1変量の χ^2 検定を行った。その結果、有意な違いが見られ($\chi^2(3)=55.69, p<.001, Cramer's V=0.60$)、残差分析によると「先—先」・「先—後」・「後—先」が少なく、「後—後」が多かった($ps<.01$)。続いて、学年によって各カテゴリの割合に違いがあるかを検討するため、学年(2)×カテゴリ(4)のFisherの正確確率検定を行った。その結果、学年による違いは有意でなかった($p=.447$)。

次に、参加児の判断理由について、各理由カテゴリの割合に違いがあるかを検討するため、1変量の χ^2 検定を行った。その結果、有意な違いが見られ($\chi^2(2)=44.92, p<.001, Cramer's V=0.66$)、残差分析によると「先にいた」・「その他」が少なく、「コップがある」が多かった($ps<.01$)。続いて、学年によって各理由カテゴリの割合に違いがあるかを検討するため、学年(2)×理由カテ

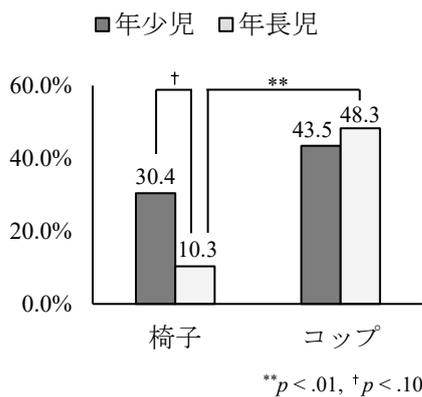


Figure 3 学年・場所別の移動許可率

Table 2 学年・場所別のネガティブ感情得点の平均(括弧内はSD)

	椅子のある場所	所有物付近		
		長辺中央	短辺中央	接近
年少児 (n=14)	1.50 (1.09)	2.07 (1.33)	1.43 (0.85)	2.21 (1.25)
年長児 (n=28)	1.68 (1.12)	1.86 (1.11)	1.79 (1.17)	2.43 (1.07)
全体 (N=42)	1.62 (1.10)	1.93 (1.18)	1.67 (1.07)	2.36 (1.12)

Table 3 学年別の占有権判断および判断理由における各カテゴリの人数と割合

	占有権判断 (1回目-2回目)				判断理由		
	先-先	先-後	後-先	後-後	先にいた	コップがある	その他
年少児 (n=23)	1 (4.3%)	1 (4.3%)	3 (13.0%)	18 (78.3%)	2 (8.7%)	19 (82.6%)	2 (8.7%)
年長児 (n=29)	1 (3.4%)	5 (17.2%)	5 (17.2%)	18 (62.1%)	6 (20.7%)	21 (72.4%)	2 (6.9%)
全体 (N=52)	2 (3.8%)	6 (11.5%)	8 (15.4%)	36 (69.2%)	8 (15.4%)	40 (76.9%)	4 (7.7%)

ゴリ(3)のFisherの正確確率検定を行った。その結果、学年による違いは有意でなかった ($p=.610$)。

考 察

本研究は、幼児における場所の占有に関する理解の発達を明らかにするために、年少児・年長児を対象に、使用可否判断課題と占有権判断課題を実施した。本研究の結果は、3つの重要な知見を提供している。

第1に、所有物付近に関して、年長児は年少児よりも「別の人物の使用を許可しない」傾向があることを示した。具体的に、年少児ではコップ上 (8.7%) の許可率のみがチャンスレベルより低かったのに対し、年長児ではコップ上 (3.4%)・長辺中央 (20.7%)・短辺中央 (31.0%)・接近 (10.3%) のいずれの許可率もチャンスレベルより低かった。さらに、「対角・隣・正面のいずれの使用も許可し、長辺中央・短辺中央・接近のいずれの使用も許可しない」という一貫性のある回答をした割合が、年長児 (55.2%) で多く、年少児 (17.4%) で少なかった。また、椅子の移動の許可率は、年長児 (10.3%) では有意に、年少児 (30.4%) では有意傾向でチャンスレベルより低かった。これらの結果をまとめると、年長児は年少児よりも厳密に、「4人掛け机で1人が占有できる場所は、コップ上や椅子を含めた4分の1程度」と考えると見える。この結果は、3歳頃から所有物の上もその物体の所有者が占有できる範囲であるという認識を持ち、5歳頃にはその範囲に関する認識が成人 (Becker, 1973) と類似した内容に発達することを示している。

第2に、幼児が「先に使用した人」よりも「現在、所有物を置いている人」に場所の占有権があると判断することを示した。これまでの研究 (Bakenman & Brownlee, 1982; 倉持, 1992; 山本, 1991) は、幼児が「先行占有のルール」を用いることを示してきた。本研究の占有権判断課題において、「人形Cが先に座っていた場所に、人形Dが所有物を置く場面」を提示し、同時に戻ってきた2人のどちらがその場所を使用できるかを尋ねたところ、幼児は一貫して「人形D」を選択することが多かった (69.2%)。このことは、同時に複数人が使用できない (1人で使用する) 物体には「先行占有のルール」が適用されるのに対し、共有機における特定の場所の使用には適用されないことを示している。

一方、使用可否判断課題において、幼児は「コップの所有者でない人物が、その場所を使うためにコップを移

動すること」をチャンスレベルと同程度に許可した (46.2%)。このことは、成人が「机上の所有物は『その場所を守るため』に置かれている」と考えて、「その場所に座らない」選択をすること (Becker, 1973) とは異なる結果であった。本研究の占有権判断課題の結果も踏まえると、どちらの人物が場所を使用できるかを判断する場合、幼児は「先に使用した人」よりも「現在、所有物を置いている人」が使用できると判断するものの、所有物による「場所の占有の機能」は成人 (Becker, 1973) ほど強く働いていないと考えられる。

第3に、本研究の結果は、グループの所有物では「個人の権利に制限がある」ことを、場所の使用に関しても幼児が理解していることを示した。具体的に、本研究において、椅子のある場所の使用に対する許可率は9割を超えた一方で、所有物付近の使用に対する許可率は、チャンスレベルか、それ以下だった。このような可否判断の違いは、グループの所有物の状態をメンバー個人の判断で変更できないこと (例: 勝手に色を塗り替えてはいけない) を理解している (Huh & Friedman, 2017) だけでなく、幼児が「メンバー個人が使用できる場所の範囲には制限がある」ことを理解していることを示唆している。

以上のように、本研究は、これまで不明確であった「幼児の場所の占有に関する理解」についてはじめて検討し、年少児と年長児では「占有できる」と考える場所の範囲が異なり、年長児がより成人に類似した判断をすることを明らかにした。さらに、幼児において、ある場所に置かれた所有物が「その場所を守るもの」として成人ほど機能しないことを明らかにした。これらの本研究の結果は、他者が持つ場所の占有の権利に関する理解が、所有の権利に関する理解 (Ross et al., 2015) よりも後に発達することを新たに示している。

このような本研究の結果は、新たな知見を提供している。しかし、本研究には、結果の解釈に留意すべき点や残された課題もある。第1に、本研究の結果は、複数人で同時に使用する物体や空間の中でも「グループが所有する机」に限定されることに留意すべきである。本研究では「幼稚園 (保育所) で皆で使う机」を用いて幼児の理解を検討した。しかし、幼児の集団生活の中には、砂場やままごとコーナーのような、より開かれた空間もある。また、基地のような所有感を感じやすい空間の場合、島の所有権 (Verkuyten et al., 2015) のように「先に使用した (いた) 人」に占有権があると判断されるかもしれない。本研究の結果は机に限定されるものであり、今

後のさらなる研究では、場所や空間の種類を考慮していく必要がある。

第2に、今後の残された課題として、幼児において「所有物を置くこと」が特定の場所を守る機能を果たすかをさらに検討することがある。具体的に、本研究では、机上の所有物に対する成人の解釈や反応 (Becker, 1973) とは異なり、参加児の半数近くが「所有物 (コップ) を移動しても良い」と判断した。この結果の1つの解釈として、コップの所有者が「その場所を選んでコップを置いた」と考える理由がなかったために、幼児は「移動しても良い」と判断したのかもしれない。例えば、他者が特定の物や場所を選好していることを理解する手がかりの1つには、習慣的な使用 (使用頻度) がある (Cleroux & Friedman, 2021)。所有者が「その場所をいつも選んでコップを置いた」場合には、幼児でも「コップを移動してはいけない」と判断する可能性がある。今後は、このような習慣的な使用 (使用頻度) の影響も踏まえて、幼児の「場所の占有」に関する理解をさらに検討する必要がある。

これらの制約や課題はあるものの、本研究の結果は、幼児の集団生活や社会性の発達を支えるための教育的な示唆を与えている。例えば、年少児と年長児と一緒に過ごす場合に、使用できる範囲を丁寧に説明する等の対応は、どちらの学年も快適に過ごすために必要かもしれない。また、対象の性質によって幼児が占有権を持つと判断する人物が異なる可能性を考慮して、幼児が自分の権利を主張することや、他者の権利を尊重することを支える必要があると考えられる。

結論として、本研究は、場所の占有に関する理解が、3歳頃から萌芽的に見られ、就学前の5-6歳頃には成人と類似したものになっていくことを示した。また、共有における特定の場所に関しては先行占有のルールが適用されないことを示した。今後、このような幼児の占有や所有に関する理解をさらに検討する研究は、幼児の社会性の発達を支えるためにも重要である。

謝 辞

調査にご協力いただいた幼児ならびに先生方、保護者の皆さまに感謝申し上げます。また、本研究の材料作成・データ収集を行った浅川沙結樹さん (千葉大学教育学部・卒業生) に御礼申し上げます。さらに、本研究の実施等にあたり、科学研究費補助金 (代表: 中道圭人, 課題番号: 22H00983) の支援を受けました。記して感謝いたします。

文 献

- Bakeman, R., & Brownlee, J.R. (1982). Social rules governing object conflicts in toddlers and preschoolers. In K.H. Rubin & H.S. Ross (Eds.), *Peer relationships and social skills in childhood* (pp. 99-110). Springer-Verlag.
- Becker, F.D. (1973). Study of spatial markers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 439-445.
- Brownell, C.A., Iesue, S.S., Nichols, S.R., & Svetlova, M. (2013). Mine and yours? Development of sharing in toddlers in relation to ownership understanding. *Child Development*, 84, 906-920.
- Cleroux, A., & Friedman, O. (2021). Young children infer feelings of ownership from habitual use. *Emotion*, 21, 607-616.
- Fasing, G.L. (2000). Toddlers' understanding of ownership: Implications for self-concept development. *Social Development*, 9, 370-382.
- Huh, M., & Friedman, O. (2017). Young children's understanding of the limits and benefits of group ownership. *Developmental Psychology*, 53, 686-697.
- 倉持清美 (1992). 幼稚園の中のものをめぐるとも同士のいざこざ——いざこざで使用される方略と子ども同士の関係—— 発達心理学研究, 3, 1-8.
- Levine, L.E. (1983). Mine: Self-definition in 2-year-old boys. *Developmental Psychology*, 19, 544-549.
- Ross, H., Friedman, O., & Field, A. (2015). Toddlers assert and acknowledge ownership rights. *Social Development*, 24, 341-356.
- Rossano, F., Rakoczy, H., & Tomasello, M. (2011). Young children's understanding of violations of property rights. *Cognition*, 121, 219-227.
- 白井 博・森田亜希子・山田真由美・岩宗威晴・二宮 香・桜井 亮 (1994). 2, 3歳児の対人的問題解決行動の発達——いざこざ場面における行動の縦断的分析—— 北海道教育大学紀要第1部C 教育科学編, 45(1), 43-55.
- Verkuyten, M., Sierksma, J., & Martinovic, B. (2015). First arrival and collective land ownership: How children reason about who owns the land. *Social Development*, 24, 868-882.
- 山本登志哉 (1991). 幼児期に於ける『先占の尊重』原則の形成とその機能——所有の個体発生をめぐって—— 教育心理学研究, 39, 122-132.